

## 清水昭俊先生の思い出

清水先生が退職されるにあたって、清水ゼミの「長老格の」二人（中野麻衣子さんと山口裕子さん）に先生の思い出を語ってもらいました。以下にフィールドノート風に記録しておきます。

まず、先生にご指導を受けた中で印象深かったことをお話し下さい。

**中野(以下N):** 一番最初の思い出と言えば、初めて指導教授として先生に助成金の申請のための推薦書をお願いした時に、申請書の下書きの文章がほとんど下線で消されていて、空いた残りの部分（ほぼ三分の二）に具体的なことを入れるように、と言われて唖然としたことですね。それが最初に受けた個人指導でした。

**山口(以下Y):** そうそう。私もそうだった。それから、ゼミでも議論の上澄みだけを拾ったようなレジュメを作る学生がいると、清水先生には珍しく厳しい口調で、「それでは議論のコンテクストが見えない」って指摘されていましたよね、ぐさっと。

**N:** そう。博士論文の構想段階の指導でも、常に自分の手持ちの資料から導き出される思考を前面に出すように指導されてきたよね。ふつうの学生の心理なら、いろいろ他人の理論を引用しようとするんだけど。「それは他人の言ったことでしょ」とあっさり退ける、みたいな……。先生のこの姿勢には、私はすごく勇気付けられました。

**Y:** 自分が持っている材料、関心、思考のオリジナリティにこだわるべし、ということを一貫して指導されたね。

続いて、先生のご研究についてはいかがですか。

**N:** 大昔に「出自論の前線」を読んだのが清水先生の最初の論文かな？具体的な内容は多くは覚えてないけど、きれいに理論の推移を整理されていて、その切れのよさに感銘を受けるとともに、読者と議論を共有するために、わかりやすく書くということがいかに大事かを知りました。それは「永遠の未開文化」でも同じ。あれで人類学の流れが初めてよく理解できたと感じました。

**Y:** 私は『周辺民族の現在』の序章を特に憶えています。一見すごくクールに「周辺民族」をみつめているようで、実はもっと厳しく批判的な視線で「周辺」を生み出す世界の構造を暴こうとする。「中心」にいる自己の立場をいつわらずにね。語り口の冷静さと秘められた「熱さ」のコントラストがとても印象的でした。で、周辺民族研究の基本的な動機は、まさにその「周辺民族」という規定（自体）が意味をなさない世界、つまり中心と周辺といった関係が解消されたような世界を展望するところにある、と

おっしゃっている。そこには人間社会に対する、「学問」の枠を超えた熱いまなざし  
があって、そこに私は人間・清水昭俊を見た思いがしたし、いろいろな意味で「希望」  
を感じたね。

N:あと、フィールドに行く前にたまたま読んだ『現代思想』の鼎談の中で、清水先生が、  
当時日本で「流行っていた」ポストモダンの人類学批判をずばり、それは西欧の自問  
自答ではないか、それに日本人も付き合うとなると、人類学はもう「内向的に」西欧  
社会研究になっちゃう。むしろこれから必要なのは、「西欧的な近代的な経験ではな  
いもの」に出会っていくことだ、とおっしゃっていたことが強く印象に残っています。  
呪文のように、フィールド滞在中も頭の中にもありました。フィールドから帰って清水  
先生が指導教授になるとは、何かの因縁かと・・・。

Y: そうだね。フィールドから帰ったら、旧長島研究室の椅子に清水先生が、これまでの  
社会人類学研究室とはちょっと違うステキな風情で座っていらした時には、浦島太郎  
の心境になりました。それはともかく、先生のご研究に触れていて感じるのは、現代  
の人類学の流れを的確に押さえながらも、それに流されないという姿勢です。みんな  
が学を包む一種の閉塞感から抜け出そうとしているように見える中、先生は古典作品  
や「日本の人類学」を見直すなど、いい意味で「わが道を行く」。この先生の研究姿勢  
が、私達への「自分の思考重視」という指導にも現れているわけだね。

では最後に、先生のお人柄について話して頂けますか。

Y: 私の場合、自分の中で九分九厘結論が出た状態じゃないと先生に相談に行けない性質  
なんだけど、先生はそれも全てお見通しなんだよね。だから、基本的には私の決断を  
尊重して下さるんだけど、そこに至る思考の経緯を推測して、的確な助言を下さるの  
には、本当に感謝すると同時に、こりゃ参ったな、と思いましたね。頭が凝り固まっ  
た時は解きほぐし、混乱した時には整理するという風に・・・。

N: うん。要するに、頭の中だけでなく、心の中も読まれちゃうんだよね。こちらが悩ん  
でご無沙汰していると、その沈黙の意味も読みとった上で、温かい助言を下さる。本  
当に、清水先生には学問とか研究面だけでなく、人間として支えられ、学ぶことが多  
かった。これほどの人格者に指導されたことはない、ってくらいかな。先生に指導し  
ていただいたことを大切に、今後の人生に生かしていきたいです。

Y: そうだね。そのことで、先生に恩返ししていきたいね。

N・Y: 清水先生、ありがとうございました。研究者としても、ますますがんばって下さい。

深田淳太郎\* 記

---

\* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程